

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	スクルドエンジェル保育園下高井戸園
法人名	SOUキッズケア株式会社
法人所在地	東京杉並区下高井戸3-3-6

1. 活動のテーマ

<テーマ>

えいごのことばで あそんでみよう

<テーマの設定理由>

当園では、保育士による日常の保育に加え、外国人講師による英語レッスンや自由遊びの時間における関わりを通して、子どもたちが英語に触れる機会があり、子どもたちは英語の音やリズムに興味を示し、挨拶や単語をまねしながら楽しむ姿が見られる。

こうした自然な興味関心を大切にし、耳が敏感な乳幼児期において、生活の中で無理なく英語の音やことばに親しめる環境を整えることが重要であると考えた。また、外部講師との関わりで得られた経験を、日常の保育の中にも広げていくことで、より継続的な学びにつながると捉えている。

そこで、保育士主体の活動と外国人講師との関わりの双方を取り入れながら、英語の音やリズムに触れ「ことばって面白い」と感じられる体験を広げ、子どもたちが主体的に関わるできるよう、本テーマを設定した。

2. 活動スケジュール

令和7年4月～令和8年3月の期間を通して、日常の保育の中に継続的に取り入れて実施した。

- ・朝の会や帰りの会における英語の歌や簡単なやりとり
- ・英語絵本の読み聞かせや音遊び
- ・英語コーナーでの自由遊び
- ・外国人講師によるレッスンおよび日常的な関わり

これらを年間を通して継続的にを行い、子どもたちの興味や反応に応じて内容を工夫・発展させた。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

英語の音やリズムに自然に触れられるよう、保育室内にCD付きの英語絵本や英語の歌の音源、英語遊びに使用できる玩具、テーマに沿ったボキャブラリーカードなどを準備し、子どもたちが自由に手に取れる位置に配置した。

また、保育士が日常の保育の中で英語の歌や簡単な表現を取り入れられるよう環境を整え、外国人講師との関わりも含めて、生活の中で自然に英語に触れられるよう工夫した。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

英語絵本の読み聞かせや英語の歌あそび、朝の会での簡単な英語表現の導入などを行い、日常の保育の中で英語の音やリズムに触れる活動を実施した。

また、外国人講師によるレッスンや自由遊びの中での関わりを通して、英語の音に親しむ機会を設けた。子どもたちが音を聞いてまねをしたり、体を動かしたりしながら表現することを大切にし、無理に発語を促すのではなく、聞く・感じる・反応する体験を重視した。

さらに、英語コーナーに設置した教材を活用し、自由遊びの中でも継続的に英語に触れられる環境を整えた。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

子どもたちは英語の音やリズムに興味を示し、音楽に合わせて体を揺らしたり、聞こえてきた音をまねしようとする姿が見られた。指差しや表情、身振りなどを通して反応する様子も多く見られ、それぞれの発達段階に応じた形で英語に親しんでいる。

日常の保育の中では、保育士が積極的に英語の絵本の読み聞かせを行っており、子どもたちは自然と英語の音に触れる機会を得ている。また、カラーボールを使用した遊びの中で、色の名前を英語で伝えながら関わるなど、遊びと結びつけた形で英語に触れる姿が見られた。

自由遊びの時間には、子どもたちが自ら英語の絵本を手に取り、友だちと一緒にページをめくりながら楽しむ様子も見られ、子ども同士の関わりの中で英語に触れる場面が生まれている。

さらに、英語講師とのプレイタイムでは、玩具や英語絵本を用いながら、英語でのやりとりやふれあいを楽しむ姿が見られた。年齢的に発語が十分でない子どもにおいても、音を聞いて反応したり、指差しをしたりするなど、非言語的な表現を通して関わる様子が見られた。

また、お別れ会に向けた活動の中では、英語の歌に合わせて体を動かしながら楽しむ姿が見られ、発音や動きの面でも、日常的な関わりの積み重ねが感じられた。

保育者は「どんな音が聞こえたかな」「まねっこしてみようか」などの声かけを行い、子どもたちの気づきや表現を受け止めながら関わっている。子ども同士で音や動きをまねし合う姿も見られ、周囲の子どもの様子に影響を受けながら関わりが広がっている。

このように、保育士による日常的な関わりと外国人講師との活動の双方を通して、子どもたちが英語の音やリズムに親しみ、主体的に関わる姿が育てられている。

また、これらの様子については、写真や記録を通して共有・振り返りを行っている。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

子どもたちは英語を「学ぶもの」としてではなく、「音やリズムとして楽しむもの」として自然に受け止めており、繰り返し聞くことで安心して関わる姿が見られた。

また、無理に発語を促さなくても、聞いた音をまねしたり、体の動きで表現したりするなど、それぞれの発達段階に応じた関わり方で英語に親しんでいることが分かった。

環境を整えることで、自由遊びの中でも自ら英語の教材に触れる姿が見られ、主体的な関わりにつながっていることを実感した。

今後も子どもたちの興味や反応を丁寧に捉えながら、日常の保育の中に無理なく取り入れ、継続的に活動を発展させていきたい。